

カビール 『ビージャク』 和訳余滴(3)

——カヘラー——

橋 本 泰 元

はじめに

本稿は前稿に続いて、既刊の拙訳『宗教詩ビージャク—インド中世民衆思想の精髓』（平凡社「東洋文庫」703、2002年）において、いくつかの理由によって省略した部分、すなわち第2番目の「サバド」（正師のことば）の後半に置かれており、パナーラス市以東でビハール州西部地帯の民衆の歌謡の形式で著わされているとされている詩篇8箇のうち、第3番目の部分をテキストを示して翻訳したものである。

この部分の標題は「カヘラー」（Kaharā）といい、下記のカヘラー(1)の第28詩節の訳注に記述したように、宗派内の伝統的な解釈によれば、カハール（kahāra）という、伝統的には天秤籠でさまざまな物を運ぶ単純労働を職能としていた低位のジャーティ名に由来する。BTMの著者は、カハールが物を運搬しながらこの民謡であるカヘラーを歌っていたのを1940年代に耳にしていた、と記している。カヘラー全体は底本では12箇の一応のまとまりをもった内容に区分されている。

概要は、本然たるものへの観想と覚知と油断、ラームの名号、世界の脆さと虚ろさ、不二なる真実在、マーヤー（無明）の不条理を説いている。

なお各カヘラーの番号は底本のものである。なお訳注略号等は、上記拙訳書を参照頂きたい。

サバド 4 カヘラー

sabada 4 kaharā

(1)

sahaja dhyāna rahu sahaja dhyāna rahu / gura ke bacana samāi ho //
 [自心の] 本然 [たるもの] を観想せよ、本然 [たるもの] を観想せよ。
 導師のことに専念しておれ。

meli sristi carā cita rākhahu / rahahu dristi laulāi ho //
 穢れた世界に惑う心を抑えよ。視線を [本然たるものに] 専注し続けよ。

jasa dukha dekhi rahahu yehi ausara / asa sukha hoihaiṁ pāye ho //
 このとき苦しみが見えるほどに、それほどに楽しみが得られるのだ。

jo khuṭakāra begi nahim lāge / hridai nivārahu kohū ho //
 専念が容易にできなければ、心から瞋恚を取り去れ。

mukti ki ḍori gārhi jani khaiṁcahu / taba bajhihaiṁ baṛa rohū ho //
 解脱の綱を強く引くな、そうすれば大きな魚を捕らえられる。

manuvahiṁ kahahu rahahu mana māre / khijhuvā khījhi na bolai ho //
 心に言え、自分を抑えておくと、擲揄に擲揄をもって話すなど。

manuāṁ mīta mītāi na choṛai / kamāuṁ gāṁṭhi na kholai ho //
 心が哀愍を棄てないように、決して絆を解かないように。

bhogahu bhoga bhukti jani bhūlahu / joga jugti tana sādhanu ho //
 対象を享受せよ、[しかし] 耽溺するな。ヨーガの方法で身体を修練せよ。

jo yahi bhāṁti karahu matavaliyā / tā mata ke cita bāṁdhahu ho //
 このように考えて、その考えに心を結びつけよ。

nahim to ṭhākura hai ati dāruna / karihaiṁ cāla kucaī ho //
 そうでなければ、[心という] 主はたいへん残酷だ、悪辣な手段を使う。

bāṁdhi māri ḍaṇḍa saba lehaiṁ / chūṭihaiṁ taba matavāli ho //
縛り付け棍棒で叩きすべてを奪う、そうすれば恍惚境は消え去る。

jabahiṁ sāvata āni pahum̐ce / pīṭhi sam̐ṭi bhala ṭutai ho //
不運（閻魔の使者）が訪れば、背骨は警棒でぼろぼろに壊れる。

ṭhārhe loga kuṭuma saba dekhaiṁ / kahe kāhu ke na chūṭahi ho //
家族の者は立ちすくんで見ており、誰が何を言っても解き放たれず。

eka to nihuri pāṁva pari binavai / binati kiye nahim̐ mānai ho //
ある者は跪いて〔閻魔の使者〕足下に懇願するが、懇願されても〔閻魔の使者は〕聞き入れず。

anacinhe raheu na kiye cinhārī / so kaise pahicanabeu ho //
〔ひとは真実在 = 神を〕覚知せずにおり、努めなかった。だから、どうして〔神はひとを〕知ろうか。

līnha bulāya bāta nahim̐ pūchī / kevaṭa garbha tana bolai ho //
〔閻魔の使者は最期に〕呼んだが話を聞かなかった、船頭が傲慢に体を突っ張ってしゃべる〔かのように〕。

jākara gāṁṭhi samara kichu nāhīm̐ / so niradhaniyā hoyā ḍolai ho //
財布に善行の果がない者は、貧しく徘徊する。

jina sama jukti āgamana kai rākhina / dharina maccha bhari ḍehari ho //
常に方法をあらかじめ講じておく者は、魚を甕に詰めてとっておく。

〈注〉 BTM の読みと解釈によると、現在のネパールとの国境地帯のミティラー地方の人々は、川魚を干して甕にとっておき、通常の食用や飢饉の時に食す。

jekare hātha pām̐va kichu nāhīm̐ / dharana lāgu tehi sohari ho //
 手足も何もない者が、その帆綱を執り引っ張る。

〈注〉「手足も何もない者」をBTMは「無属性のブラフマン」と解釈している。

pelanā achata peli calu baure / tīra tīra kā ṭovahu ho //
 艚があるのだから漕いでいけ、愚か者よ。川岸をどうして伝っていくのか。

uthale rahahu parahu jani gahire / mati hāthahu kī khovahu ho //
 浅瀬におれ、深みにはまるな。でなければ、おまえは手に持っているものを失う。

tara ke ghāma upara ke bhūmbhūri /
 chām̐ha katahūm̐ nahīm̐ pāyahu ho //
 下には〔灼熱の〕陽光、上には焼ける砂。日陰はどこにも見つけられず。

aisani jāni pasījahu sījhahu / kasa na chatariyā chāyahu ho //
 このように知り汗をかきうだっていて、何故に日傘をささないのか。

jo kichu kheṛa kiyahu so kīyahu / bahuṛi kheṛa kasa hoī ho //
 今までなした悪戯は仕方がない、再び悪戯をなし得ようか。

sāsu nanada dou deta ulāṭana / rahahu lāja mukha goī ho //
 義母、義妹ふたりが嘲り冷やかし、おまえは恥じ入って顔を隠す。

〈注〉この前半句を諸注釈書は「義母（＝マヤー 妄執）と義妹（＝無明）がおまえ（＝人間）を上へ下へと振り回し」と解釈している。

gura bhau ṛhīla goni bhāi lacapaca / kahā na mānehu morā ho //
 黒糖が湿気って麻袋がねとついた、おまえは私の言ったことを聴かない。

tājī turakī kabahuṁ na sādhehu / caṛhehu kāṭha ke ghorā ho //
アラブ馬とトゥルク地方産の馬をとっくの昔に調教せず、木馬に乗る。

tāla jhām̃jha bhala bājata āvai / kaharā sabha koī nāce ho //
手拍子、小シンバルを上手に鳴らしてやって来て、みなカヘラーを踊る。

〈注〉カヘラーの原語 kaharā はカハール kahāra の派生語で、後者はヒンドゥーの一つのジャーティ名で、そのジャーティは伝統的には籠で水や物を運ぶことを職能としていた。カヘラーは、多くの場合この人たちが歌う民謡を意味し、たいがい歌詞は一行が38音節より成り、踊りを伴う。このサバドの中の「カヘラー」の区分における各行は、間の手にも似た「ホー」という音節で終わっているのが特徴となっている。

jehi raṅga dūlahu byāhan āye / dulahini tehi raṅga rācala ho //
花婿が装って結婚しにやって来るが、花嫁はその色に〔自らを〕染める。

naukā achata khevai nahim̃ jānehu / kaiseka lagabehu tīrāho //
舟はあるが、おまえは漕ぎ方を知らず、どうして彼岸に達せようか。

kahahi kabīra rāma rasa māte / jolahā dāsa kabīrā ho //
カビールは言う、ラームへの情愛に耽溺した、ジュラーハー（織工ジャーティ）である奴僕カビールは。

(2)

mati sunu mānika mati sunu mānika / hridayā banda nivārahu ho //
〔私の〕考えを聞け、ルビー（の如き人間）よ、考えを聞け。心の束縛を解け。

aṭapaṭa kumharā kare kumharaiyā / camarā gām̃va na bām̃ce ho //
下手な壺作りが壺作りをする、草でできた村は助からない。

〈注〉BPP と KVS は、後半句の「革でできた村」を身体の象徴表現と解釈している。BTM は、この後半句を *camarā gāmvana bāṁce ho* と読み「チャマルがヴェーダを読み説く」と解釈している。チャマルは伝統的には皮革業を営む「不可触民」であり、BTM はこの語彙をジャーティ差別主義者のブラーフマン（パラモン）の象徴と解釈している。なお動詞の *bāṁce* には、「助かる」と「読む」の両方の意味がある。前半句の「壺作り」は『ピージャク』の他所にも頻出し、「個我（＝人間）の創造者」の象徴である。したがって、後半句の意味は、「チャマル」の意味の牽強附会の解釈を除けば BTM の解釈が適切と思われる。ただし、*gāmvana* の第一義は「歌い方」であり、「ヴェーダ」という直接的な意味はない。

nita uṭhi kuriyā peṭa bharatu hai / chipiyā āṅgana nāce ho //
 毎日起きて織工は腹を満たし、染物師は庭で踊る。

nita uṭhi nauvā nāva caṛhatu hai / berahim̃ berā bore ho //
 毎日起きて船頭は舟に乗り、何度も舟を沈ます。

rāura kī kichu khabari na jānahu / kaise kai jhagarā niberahu ho //
 王様の消息を知らず、どうして争いを解決するのか。

eka gāmvā mem̃ pāñca taruni basai / jehimā jeṭha jeṭhāni ho //
 一つの村に五人の乙女が住み、そこに義兄と義姉がいる。

āpana āpana jhagarā pragāsina / piyā som̃ prīti nasāina ho //
 お互いの争いを顕わにし、愛しいものへの恋情を台無しにする。

bhaim̃sina mām̃him̃ rahata nita bakulā / tikulā tāki na līnhā ho //
 水牛の〔群れの〕なかにいつも椋鳥がいるが、獲物を見つけれられない。

〈注〉「獲物」の原語 *tikulā* は、HSS や諸辞典に記載がないが、諸注釈書は「見るべきもの（対象）」と解釈している。それに従って、ここでは「獲物（＝水牛の体についている虫）」の意味に解した。

(90)

gāina māmhīm baseu nahim kabahī / kaise ke pada pahicanabeu ho //
牝牛のなかに住んでいないのだから、どうしておまえが〔自己の〕地位
を理解できるか。

panthī pantha būjha nahim līnhā / mūr̥hahim mūr̥ha gamvārā ho //
旅人は道を理解しなかった。愚者のなかの愚者は無知なり。

ghāṭa choṛi kasa aughāṭa reṅgahu / kaise kai lagabeu tīrā ho //
〔正しい〕ガート（沐浴場）を捨てて悪しきガートを這い回り、どうし
て彼岸に着けようか。

jatāita ke dhana herina lalacina / kodāita ke mana daurā ho //
大碾き臼でできる〔小麦〕粉を嫉み探しつつ、小碾き臼〔でできる粗末
な粉〕に心が動揺する。

dui cakarī jani darara pasārahu / taba paiho ṭhika ṭhaurā ho //
両方の碾き石に穀物を入れるな、そうすれば正しい場所に至れる。

prema bāna eka satagura dīnhā / gāṛo tīra kamānā ho //
愛の矢を一本、正師が放った。その弓矢は強靱なり。

dāsa kabīra kīnha yaha kaharā / maharā māhim samānā ho //
奴僕カビールはこのカヘラーを詠み、マヘラーのなかに沈潜した。

〈注〉「マヘラー」には、「最上の」の意味と「カハール」ジャーティの異
名の意味がある。

(3)

rāma nāma kā sevahu bīrā / hari dūri nāhim duri āsā ho //
ラームの名号を念誦せよ、勇者よ。ハリ（神）は遠からず、〔人々の〕
期待が遠いのみ。

aura deva kā sevahu baure / ī saba jhūṭhī āsā ho //

ほかの神を崇拜すればよい、愚者よ。それはすべて偽りの期待だ。

ūpara ujara kāha bhau baure / bhītara ajahum̃ kāro ho //

表が輝いていて何になる、愚者よ。内側はいまも真っ黒なのに。

tana kā vridha kahā bhau baure / manuvām̃ ajahum̃ bāro ho //

身体の老化が何になる、愚者よ。心はいまも少年〔の心〕なのに。

〈注〉諸注釈書は、この一行を「身体的に老化しても、心は幼いままであり落ち着いていない」と解釈している。

mukha ke dām̃ta kahām̃ gau baure / bhītara dām̃ta lohe ke ho //

口の歯はどこへ行ってしまったのか、愚者よ。内面の歯は鉄でできているのに。

〈注〉「内面の鉄の歯」を、諸注釈書は「渴愛」の象徴表現と解している。

phira phira canā cabāu vikhai ke / kāma krodha mada lobha ke ho //

走り回って毒の豆を喰らう、愛欲、瞋恚、陶醉、貪欲の豆を。

tana sakala saṅgyā ghaṭi gayāu / manahim̃ dilāsā dūnī ho //

身体のすべての感覚は鈍くなるが、心の熱情は倍加する。

kahahi kabīra suho ho santo / sakala sayānapa ūnā ho //

カピールは言う、聴けサントよ。すべての賢さは取るに足らず。

(4)

voṛhana morā rāma nāma / maim̃ rāmahim̃ ke banijārā ho //

私の外套はラームの名号なり、私はラーム〔の名号〕の商人。

(92)

rāma nāma kā karahūṁ banijiyā / hari morā haṭavāi ho //

私がラームの名号の商いをし、ハリ（神）は私の商品。

sahasa nāma kā karaūṁ pasārā / dina dina hota savāi ho //

私は何千もの名号を広め、日に日に〔儲けが〕増えていく。

jāke deva beda pacha rākhā / tāke hota haṭavāi ho //

神々とヴェーダが味方したものの、そのものが商品である。

〈注〉「神々とヴェーダが味方したもの」の意味を、BTMとBPPは、ヴェーダとブラマー・ヴィシヌ・シヴァの神々が説いた、これらの背後にある真実をすなわちラームのことに解している。

kāni tarājū sera tini pāuvā / tokina ḍhola bajāi ho //

分銅に天秤、1セールと3パーンオ、何故か太鼓が鳴る。

〈注〉「セール」は、現代語辞書によれば約0.9kg、「パーンオ」は4分の1セール。諸注釈書も恣意的な解釈をしていて、この行の前半句の意味がよく分からないが、天秤で量り売りをする商人が、分銅の重さをごまかして、3パーンオしかないものを1セールと言って売っていることを表現しているものと思われる。後半句のtokinaの語形はtukinīと読むテキストもあり、いずれの語彙も辞書に見あたらない。ここではBTMの解釈に従ったが、太鼓の原語ḍholaには、「喧伝する」、「ほらを吹く」などの慣用句に使われる場合があるので、この一行全体のおおよその意味は、商人の詐欺を世俗の虚妄性の比喩表現に用いていると考えられる。

sera paserī pūrā kaile / pāsaṅgha katahūṁ na jāi ho //

1セールで1パーセリーになった。分銅が少しも動かない〔のに〕。

〈注〉「パーセリー」は5セールの重さ。上記の解釈に従えば、前半句は過度な詐欺を表現しているものと思われる。

kahahi kabīra suno ho santo / jora calā jahamṛāī ho //

カビールは言う、聴けサントよ。無理をすれば騙される。

(5)

rāma nāma bhaju rāma nāma bhaju / ceti dekhu manamāhīm ho //

ラームの名号を念誦せよ、ラームの名号を念誦せよ。目覚めて心のなか
を見よ。

laccha karori jori dhana gāre / calata ḍolāvata bām̄hī ho //

何十万、何千万もの富を蓄え〔土中に〕埋め〔隠し〕、両手を振って
(自慢して) 歩く。

dādā bābā au parapājā / jinhake yaha bhuiīm bhām̄re ho //

父、祖父そして曾祖父、この土地、家財はかれらのもの。

āṁdhara bhaye hiyahu kī phūṭī / tinha kāhe saba chām̄re ho //

盲目となり心の眼も壊れていたかれらは、なぜすべてを捨て去ったのか。

ī saṁsāra asāra ko dhandhā / antakāla koi nāhīm ho //

この世は虚妄の営み、最期にだれもおらず。

upajata binasata vāra na lāgaiīm / jyom̄ bādala kī chām̄hīm ho //

生滅に時はかからず、雲の影の如し。

nātā gotā kula kuṭuma saba / inhakara kauna baṛāī ho //

姻族、氏族、一族、家族すべて、その何が偉大なのか。

kahahi kabīra eka rāma bhaje binu / būṛī saba caturāī ho //

カビールは言う、唯一のラームを念誦せず、すべての賢者は〔苦海に〕
沈む。

(94)

(6)

rāma nāma binu rāma nāma binu / mityhā janama gamāyo ho //
ラームの名号なくラームの名号なく、〔ひととは己の〕生を空しく費やす。

semara sei suvā jyom̃ jaham̃re / ūna parī pachitāi ho //
セーマルの樹に鸚鵡が騙され、〔実のなかの〕綿に後悔するように。

〔注〕セーマルの樹は、和名バンヤノキ、英語名 silk cotton tree という。
高い落葉樹で深紅色の大きな肉厚の花が咲き、その実には綿ばかりで果肉がない。伝統的な詩の慣用表現では、この樹の大きな美しい花に魅せられた鳥の失望・落胆を表現するのに用いられる。

jaise madapī gām̃ṭhi aratha de / gharahūm̃ ki akila gamāi ho //
酒飲みが〔腰布の〕包みから銭を出して〔酒を飲み干し酔って〕、家のことを失念するように。

svāde vodra bharai dhaum̃ kaise / osai piyāsa na jāi ho //
香りで腹がどうして満ちようか、露で渴きは消えない。

darba hīna jaise purasāratha / manahim̃ mām̃hi tam̃vāi ho //
資財のない者の人生の三大目標〔が遂げられず〕、心の中で後悔するようになる。

gām̃ṭhī ratana marama nahim̃ jānai / pārakha līnhā chorī ho //
包みのなかの貴石、本質を知らず。吟味してから捨てよ。

kahahi kabīra yaha ausara bīte / ratana na milai bahorī ho //
カビールは言う、この機会を逃せば、貴石は再び得られず。

(7)

rahahu sambhāre rāma vicāre / kahatā hauṃ jo pukāre ho //
〔自己を〕保持せよ、ラームを思念せよ、私（カビール）は声高く言う。

mūṛa muṛāya phūli ke baiṭhe / mudrā pahiri mañjūsā ho //

〔出家遊行者やヨーガ行者等は〕頭を剃り、得意げに、耳環を付け石窟に坐す。

〈注〉「石窟」の原語 mañjūsā は、Skt. mañjūṣā (「箱、籠」の意味) の派生形と考えられるが、HSS には「石」の意味もあって諸注釈書はそれを基にして「石窟」の意味に解釈している。字義通りの解釈が困難なので、ここではそれに従った。

tehi ūpari kichu chāra lapeṭe / bhītari bhītari ghara mūsā ho //

その〔体の〕うえに灰を塗っているが、その内部は鼠が巣くっている。

gāṃva basantu hai garbha bhāratī / bāma kāma haṅkāra ho //

威張ったパーラティーが村を作って住んでいるが、左道を行じて誇っている。

〈注〉「パーラティー」は、ふつうシャンカラ（8世紀の不二一元論の大哲学者）創設によるとされるダシャ・ナーミー（「十の名を持つ者」の意味）派という出家遊行者のひとつの僧名。この行の後半句は、正統派とみなされる出家者が、ヒンドゥー教正統派によって最も非正統とされる左道派の儀礼を行っていることを非難しているものと解される。

mohani jaham̃ taham̃ le jāi haim̃ / nahim̃ pata rahala tumhārā ho //

〔世人を〕魅惑する者（マーヤー）があちこち連れ回し、おまえの間体はなくなってしまう。

mām̃jha mām̃jhariyā basai so jānai / jana hoi haim̃ so thīrā ho //

心蓮華の中に存するものを知っている者は、寂静となる。

nirabhai bhaye taham̃ gura ki nagariyā / sukha sovai dāsa kabīrā ho //

その導師の都で無畏となって、奴僕カビールは安楽に眠る。

(96)

(8)

chīmā kusala au sahī salāmata / kahu kauna ko dīnhā ho //

(ヒンドゥー教徒の) 安寧と (イスラーム教徒の) 平安, 言ってみよ, 誰が [これらを] 与えたのか。

āvata jāta doū bidhi lūṭe / sarva taṅga hari līnhā ho //

[マーヤーは] 来ては去って, 二通りに略奪し, すべてを奪い尽くした。

〈注〉原語 taṅga がペルシア語とすれば「きつい, 窮屈な」の意味であるが, 文脈上意味が通じない。BTM と KVS は, この語彙の意味を「智慧」の象徴表現としているが根拠が示されていない。BPP は sarva taṅga を各々の原義から「体制, 機構」の意味に解釈しているが, やはり根拠が示されていない。しかしながら, 文脈上, この両者の解釈は可能と思われる。ここでは, 文脈上不都合がないと判断して単純に「すべて」と訳しておいた。

sura nara muni jati pīra auliyā / mīrā paidā kīnhā ho //

天, 人, 牟尼, 遊行者, 導師, 聖者, 首領をつくった。

kahaṁ lauṁ ganaṁ ananta koṭi lauṁ / sakala payānā kīnhā ho //

どこまで数えればよいのか, 無限億までか。すべてが逝ってしまった。

pānī pavana akāsa jāyaṅge / candra jāyaṅge sūrā ho //

水, 風, 空 [地, 火の五大要素] が無くなり, 月も太陽も無くなる。

ye bhī jāyaṅge vo bhī jāyaṅge / parata na kāhu ke pūrā ho //

これも無くなりあれも無くなる, そして誰が満たされるのか。

kusala kahata kahata jaga binasai / kusala kāla kī phāṁsī ho //

安寧と言いながら世界は破滅する, 安寧は死神の鞆索なり。

kahai kabīra sārī duniyāṁ vinase / rahala rāma avināsī ho //
カビールは言う、全世界は破滅するが、ラームは不滅なり。

(9)

aīsani deha nirāpani baure / muvale chuvai nahim̃ koī ho //
この身体は自分のものではない、愚か者よ。死ねば誰も触らない。

〈注〉BTM, BPP, KVS は、前半句の nirāpani を nirālapa と読んで、「利
那的な」あるいは「穢れた」の意味に解釈している。しかし、nirā-
lapa やこれに近似した語彙は諸辞典に載っていない。

daṅṅravā ki ḍoriyā tori larāini / jo koṭina dhana hoī ho //
〔人は死者の〕腰の布さえ破り取る、たとえ億万長者であろうとも。

uradha nisvāsā upaji tarāsā / haṁkarāina parivārā ho //
上に呼気が出て激痛が走り、〔死者は〕家人を大声で呼び寄せる。

jo koi āvai begi calāvai / pala eka rahana na pāi ho //
誰かがやっ来て早く〔死体を〕片づけ、一瞬たりとも〔死体は自己の
家に〕留まれない。

candana cīra catura saba lepaiṁ / gare gaja muktā ke hārā ho //
賢い人はみな白檀〔の木を〕を擦って〔その軟膏を体に〕塗り、首には
象の真珠の首飾りを着けている。

〈注〉「象の真珠」は、ヒンドゥー教徒の民間信仰で、象の前頭に大きな真
珠があるとされている。

cauṁsaṭha gīdha muye tana lūṭaiṁ / jambukana vodra bidārā ho //
六十四羽の秃鷲が死体を奪い、ジャカルが腹を食い裂く。

〈注〉「六十四羽の」の意味が不明。BTM と KVS は、cahuṁ disi (「四方

(98)

の」の意味)の異読を挙げている。

kahahi kabīra suno ho santo / gyāna hīna mati hīnā ho //
カビールは言う、聴けサントよ。智慧のない者は理解できず。

eka eka dīnā yāhī gati sabakī / kahā rāva kahā dīnā ho //
いつの日かこれが皆の帰趨であることを、たとえ王であろうとも貧者であらうとも。

(10)

ho sabahina mem̄ haum̄ maiṁ nāhīm̄ / mohi bilaga bilaga bilagāila ho //
「私」はすべて〔の有情〕のなかにあるが〔それは〕「私」ではない、
「私」を別々にしてしまった。

〈注〉この行は非常に難解であり、諸注釈書はさまざまな解釈を提示しているが、第一の「私」は純粹精神であるアートマン(真我)のことであり、第二、第三の「私」は個々の身体の主体すなわち自我意識のことと解される。

oṛhana morā eka pichaurā / loga bolaiṁ ekatāī ho //
「私」の衣服は一枚の覆い布、〔だから〕人々は同一と言う。

〈注〉人々は無明によって現象世界の主体である自我と真我を同一視しているのである、との意味に解される。

eka nirantara antara nāhīm̄ / jyaum̄ sasi ghaṭa jala chāī ho //
唯一、恒常、差異がない。〔個々の〕水壺の水に映える月影のように。

〈注〉この行の主語は真我である「私」と理解される。なお、水壺の原語 ghaṭa の Hi.の意味には「身体」の意味もある。

eka samāna koi samujhata nāhīm / jāte jarā marana bhrama jāī ho //
 唯一，平等〔であること〕を誰も理解できず，理解できれば老死，迷妄
 がなくなる。

〈注〉後半句の jāte の字義は「逝くときに」の意味であるが，文意が通ら
 ないので，注釈書の一致した解釈である「理解できれば」に従った。

raina divasa ye tahavām nāhīm / nāri purakha samatāī ho //
 夜，昼，これがそこにはなく，女も男も〔そこでは〕等しい。

〈注〉前半句の「そこ」とは真我である「私」と解される。

haum maim bālaka būr̥ho nāhīm / nā more celakāī ho //
 「私」は少年でも老人でもなく，青年でもない。

trividhi rahaum sabhani mā baratoim / nāma mora ramurāī ho //
 三つの様態すべてにゆきわたっている，「私」の名前はラーム王なり。

〈注〉「三つの様態」とは，前の行の「少年，青年，老人」のことで解され
 る。

paṭhaye na jāvaum āne nahim āvaum / sahaja rahaum duniyāī ho //
 〔私は〕遣られても行かず連れられても来ず，自然に世界にいる。

jolahā tāna bāna nahim jānai / phāṭhi bine dasa thāmī ho //
 ジュラーハー（織工）が経糸，緯糸を知らず，〔布を〕十箇所破れたた
 ま織っている。

gura paratāpa jinhaim jasa bhāsyo / jana birale so pāī ho //
 誉れ輝く導師の威光，それを希なる人が得られる。

(100)

ananta koṭi mana hīrā bedhā / phiṭakī mola na pāi ho //

無数億の意（自我意識）は金剛石を砕き、明礬の値打ちもなくしてしまふ。

surā nara muni jāke khoja pare haim̃ / kichu kichu kabirā pāi ho //

天、人、牟尼が探し求めているもの、〔それを〕少しずつカビールは得た。

(11)

nanadī ge taim̃ vikhama sohāgini / taim̃ nindale saṃsāra ge //

義妹よ、あんたは大変幸せな女、あんたはこの世を眠らせたのね。

〈注〉このカヘラーの、主に行末に ge という間投詞があって特徴的となっているが、BTM と BPP の解説によれば、ビハール州ミティラー地方の女性同士が用いる呼びかけの言葉である。

āvata dekhi maim̃ eka saṅga sūū / tai yau khasama hamārā ge //

私（兄嫁）がやって来て見ると一緒に寝ていた、あんたと私の旦那様が。

more bāpa kai dui mehararuvā / maim̃ aru mora jeṭhānī ge //

私の父には二人の女（妻）がいる、私と私の義姉よ。

jaba hama rahali rasika ke saṅga mem̃ / tabahim̃ bāta jaga jānī ge //

私が粹人と一緒にいたときに、世間は〔私の〕ことを知ったの。

māi mora muvali pitā ke saṅga / sarā raci muvala saṅghātī ge //

私の母は父と一緒に死に、親族も薪を積んで死んだ。

āpuhi muvali aura le muvalī / loga kuṭuma saṅga sāthī ge //

〔母は〕自らも死んで、家族と友人を伴って死んだ。

jaba lagi svāṃṣa rahai ghaṭa bhītara / tau laum̃ kusala pariḥaim̃ ge //
 氣息が身体のなかにある間は、安寧に暮らせる。

kahahi kabīra jaba svāṃṣa nikari gau / mandila anala jare haim̃ ge //
 カビールは言う、氣息が出てしまうと、身体を火が燃やす。

〈注〉後半句の mandila は mandira (「寺院」の意味) と同じであるが、隠喩として「身体」の意味がある。このカヘラー全体の意味は、字義通りには非常に難解であるが、他所で、「義母と義妹」という比喩が逆説表現の箇所 で用いられていた。そこでは「義母」は懸念、「義妹」は邪見の意味で用いられている。ここでも、その比喩表現と理解することができる。註釈書のなかで、最も整合性のある解釈をしている BPP によれば、「義妹」=「邪見」, 「私」=「明, 智慧」, 「私の旦那様」=「有情」, 「私の父」=「自我意識」, 「義姉」=「無明」, 「私の母」=「マーヤー (幻惑)」, 「粹人」=「無明に覆われた世俗の人々」, 「親族, 家族, 友人」=「心の迷妄」という比喩表現である。

(12)

ī māyā raghunātha ki bauri / khelana calī aherā ho //
 このマーヤーはラグナータの狂女、獵師となって狩りに行った。

catura cikaniyā cuni cuni māre / koi na rākheu nyārā ho //
 [彼女は] 知者や色男を摘んでは殺し、誰も放っておかなかった。

maunī vīra digambara māre / dhyāna dharante jogī ho //
 沈黙の行者, [感官を統御する] 勇者, 裸形の行者を殺し, 禪定を修するヨーガ行者も [殺した]。

jaṅgala meṃ ke jaṅgama māre / māyā kinahuṃ na bhogī ho //
 森を徘徊するジャンガマ (リンガーヤット派行者) を殺し, マーヤーを誰も享受できなかった。

(102)

beda parhante beduā māre / pūjā karante svāmī ho //

ヴェーダの誦呪者を殺し、プージャー（礼拝供養）するスヴァーミー（院主）も〔殺した〕。

aratha vicārata paṇḍita māre / bāṁdhe sakala lagāmi ho //

アルタ（財）〔などの人生三大目的〕を考察するパンディット（学僧）を殺し、すべてを手綱で縛り付けた。

siṅghi rikhi bana bhītara māre / sira brahmā ke phori ho //

一角仙人を森のなかで殺し、ブラフマー神の頭を砕いた。

〈注〉「一角仙人」の説話は『マハーバーラタ』『森林編』第110～113章所収が有名である。その概要は次の如くである。

ヴィバーンダカという仙人が三昧に入っていたが、通りかかった天女ウルヴァシーに一目惚れし、うっかり射精してしまった。牝鹿がそれを水とともに飲んでしまい懐妊して男子が産まれた。その男子は人間であったが頭に一角があったので、ヴィバーンダカ仙はリシュヤ・シュリング（一角仙人）と名付けて養育した。

一方アング国（現ビハール州北東地域）はバラモンの怒りで旱魃に苦しんでいた。帝師たちは相談して、かつて女性の顔すら見たことのない厳しい禁欲を守っている一角仙人をお連れすれば、降雨があるだろうということになった。国王ローマ・パーダは遊女たちをヴィバーンダカ仙の庵に派遣した。ヴィバーンダカ仙が庵を留守にする隙を狙って、遊女は庵のなかに忍び込みさまざまな手管を使って一角仙人を誘惑した。ヴィバーンダカ仙が戻る前に遊女は立ち去り、一角仙人はヴィバーンダカ仙に、大変美しい男性がやって来たと、その肢体の特徴までも細かく報告した。

翌日、ヴィバーンダカ仙は果実と薪を採りに庵を留守にする前に、一角仙人に、同じ人が尋ねてきても、大変悪い人だから無視するようにと諭した。ヴィバーンダカ仙が外出すると再び遊女がやって来て、彼女の仕草に魅了された一角仙人はアング国に行ってしまった。そして国王ローマ・パーダは自分の娘シャーンターと一角仙人を結婚させた。

「ブラフマー神の頭…」の説話は、『バーガヴァタ・プラーナ』第

3巻第12章や『マツヤ・プラーナ』や『シヴァ・プラーナ』に載っているが、その概要は次の如くである。

ブラフマー神はシヴァ神とパールヴァティー姫の結婚式に出席していたときに、パールヴァティーの美貌に魅了されてしまった。これを見ていたシヴァ神は怒ってブラフマー神の頭を手で殴った。するとブラフマー神の頭が、シヴァ神の手から離れなくなってしまった。ヴィシュヌ神はシヴァ神に、聖地パドリカー（現パドリーナート）の庵で苦行を行えば手と頭が離れるだろうと忠告した。このようにブラフマー神の頭は、彼の心の迷妄によって割れてしまった、という訳である。

nātha machandara cale pīṭha dai / śiṅghalahū mem̄ borī ho //

マツエーンドラナートは〔ヨーガ行に〕背を向けて去り、スィンハラ
国で〔王妃たちに〕耽溺した。

〈注〉ナート派の伝承では、マツエーンドラナートは神話的な開祖アーディナート（シヴァ神）の弟子で、この派の実質的な開祖ゴーラクナート（11世紀頃）の師とされている。性的な要素の多い左道派のヨーガ行に傾倒していった師マツエーンドラナートを、ゴーラクナートが救出したという伝説がある。

sānkaṭa ke ghara karatā dharatā / hari bhagtā ke cerī ho //

〔マーヤーは〕シャークタ派の家では主人であり、ハリの帰依者の〔家
では〕女中。

kahahi kabīra suno ho santo / jyūm̄ āvai tyūm̄ pherī ho //

カビールは言う、聴けサントよ。〔マーヤーが〕やって来ればそのまま
帰せ。